



#30

とき とわ ペーゼ  
失われた刻に永遠の接吻を。

著: 藍澤たすく

イラスト: かもめ遊羽

「何よ！ 本当の親でもなくせに、偉そうに母親づらししないでよ！」

「……！」

激昂したあまり思わず叫んでしまった自分自身の言葉に、来瞳は凍りついた。

目の前には同じように言葉を失った成実——来瞳の叔母——が驚きと悲しみの入り交じった表情でこちらを見つめている。

「っ！」

来瞳は成実を背を向けると玄関から自宅を飛び出した。

後ろで成実が何かを叫んでいたが、すでに言葉の意味は理解できなかった。

もう、ただの音としてしか認識できなかった。

（あたし、最低だ——）

走りながら来瞳は深く後悔していた。

成実は来瞳の両親が10年前に行方不明になって以来、まるで本当の母親のように一生懸命自分の面倒を見てくれた。

自身の結婚も来瞳のために諦め、ただただ彼女のために身を粉にして働いてきたのだ。

それを判っていたはずなのに——いや、判っていたが故に、成実に対する反発が激しい言葉となつて来瞳の心の底からとめどなく湧き出てしまったのだ。

最初は冷静に将来の話をしているつもりだった。

だが大学に行かず、すぐにデザイナーとして働きたい……という来瞳の希望は成実から激しく否定された。

来瞳にしてみれば、いつまでも成実の世話になるのは心苦しいという気持ちがあった。

成実にしてみれば、高校を出てすぐに働き始める苦勞を自らがよく知っていたから……という事情があった。

お互いがお互いを思いやった故の考えだったはずなのに……。

（あんな事を言うなんて……。あたし、馬鹿だ。本当に馬鹿だ——）  
10分ほども走っただろうか。

来瞳は近所の児童公園のブランコの上に腰を下ろした。  
夕闇が迫る公園にはもう人影もなく、ただブランコの鎖の錆びた音がキイキイと悲しげな音をたてているだけだった。

やがて市の公共スピーカーから、自宅への帰宅を促す童謡のメロディが響き始めた。

来瞳は制服のスカートのポケットから一枚の写真をそと取り出した。

（お父さん、お母さん——）

それは来瞳が7歳の時に家族で撮った七五三の時のものだった。

綺麗な着物に身を包んだ自分が、笑顔の父と母に挟まれてちよつと照れくさそうに、でも幸せそうに笑っている。

家族で撮った最後の写真だった。

この1週間後、来瞳の両親は突然失踪した。

父も母も、ともに世界的に有名な科学者だっただけに、当時はかなり大きなニュースとして世間を騒がせた。

しかし今、彼らを覚えている人間はごく少数しかいないだろう。世間なんて所詮そういうものなのだ。

（お父さん、お母さん——どうしてあたしを置いていってしまったの——）

ブランコはキィキィと揺れている。

「あたし、疲れたよ……もう、消えちゃいたいよ……」

来瞳は深いため息とともに、誰に言うでもなく、そう呟いた。

冷たい風がひゅうひゅうと悲しい音を立てている。

「あ……」

突然強まった風にさらわれ、来瞳の手から大事な写真が離れ宙を舞った。

「待って！」

来瞳は慌ててそれを追いかける。

しかし風に舞う写真はまるで自分の意志を持っているかのように、右へ左へと揺れ、来瞳の手に戻ろうとはしなかった。

「——！！」

やがて写真は繁華街の方のビルの谷間に、吸い込まれるように吹き上げられていってしまった。



「きゃっ……!?」

写真を追いかけて狭いビルの谷間に入った来瞳は、小さく悲鳴を飲み込んだ。

「死体……?」

ビルの合間の奥に出来た小さな空き地に、裸の人間が折り重なるように放置されていたからだ。

「……違う。これ、ロボットだわ……」

確かに、ほんやりとした月明かりに照らされているのは死体ではなく、ロボットだった。

マネキンでないと判ったのは、表皮がはがれてむき出しになった部分から精密な機械が覗いていたからだ。

「どうして、こんなに……」

戸惑いながらも来瞳は写真を探し続ける。

そのうちどうやらここは廃棄されたロボットが不法投棄された場所らしいということがわかってきた。

人型のロボットを始め、工業製品を作るためのハンドアームだけのロボット、愛玩用として作られたであろうブードル型のロボット……様々なロボット達が無秩序に、無造作に積み上げられている。

しかし、折り重なるのが死体ではなく、ロボットだとわかったとしても、あまり居心地の良い場所ではなかった。

大量の無機質な瞳が、写真を探す自分を追っているように感じられて不気味だった。千の瞳に千の来瞳が映っている。不安そうに、写真を探すその姿を……。

もう見つからないかもしれない……来瞳が諦めかけたその時、声がした。

「こちらの写真はお嬢様の物ではないですか？」

「えっ……？」

来瞳があわてて声のした方を振り向く。

そこにはテール・コートに身を包み、小さなシルクハットをかぶって佇む青年の姿があった。

それはまるで古いヨーロッパ映画に出てくる執事のような印象を来瞳に与えた。

折り重なるロボット群の中で、背をまっすぐにして立つ彼の姿は周囲から奇妙に浮いていて、一種異様な雰囲気を纏っている。

「この真ん中に映っているお嬢様と、貴女の瞳の虹彩パターンが99.9%一致しておりますので、同一人物と判断いたします」

そう言っつて青年は恭しく写真を来瞳に差し出した。

「あ、ありがとうございます……ございます……あっ！」

写真を受け取りながら思わず、来瞳は声を洩らした。

青年の指先の皮膚が剥け、そこから少しだけ機械が覗いていたからだ。

「貴方も、ロボット、なの？」

「そうです。CZ-800C・対人奉仕特化型ロボット……つまり、いわゆる執事ロボットとして、私は開発されました」

そう言っつて青年はニコリと微笑んだ。

まるで人間にしか見えない、自然な笑顔だった。

「せっかくだからお茶でもいかがですか？ お嬢様？」

「え……？」

それは不思議な光景だった。

ロボット達の墓場の奥に案内された来瞳はもう一度辺りを見回した。

ロボットの廃棄パーツで作られたであろう壁は、どうしたカラクリか薄い燐光を放っていて、周囲を淡い緑黄色に染めている。その壁に囲まれた真ん中には5メートル四方ほどの赤い絨毯。

その上に置かれたアルデコ調のテーブルひとつと椅子2脚。そこだけが周囲と違って白いスポットライト状の光源で照らされている。

およそ想像し得ぬ光景だった。

「さ、お座り下さい」

青年は来瞳に椅子に腰掛けるよう促すと、優雅な手つきでティーセットを来瞳の前に置いた。そして流れるような動作でティーカップの中に琥珀色の液体を注ぎ込んだ。

「わあ……」

来瞳は思わずため息をもらした。

青年が淹れた紅茶があまりにも芳醇な香りを放っていたからだ。

「フオートナム・アンド・メジソンのクイーンアナです。大丈夫ですよ。こんなところですが、

品は確かです。どうぞお召し上がり下さい」

「は、はい、いただきます……」

来瞳はおずおずとティーカップに口をつけた。

瞬間、口腔に豊かな味わいと滑らかな芳香が広がった。

あまりにも美味しさに来瞳は言葉を失った。

「お口に合いませんでしたか？」

ティーカップを持ったまま固まってしまった来瞳に、青年が心配そうに声をかける。

「あ、いいえ！ あ、あたしこんな美味しい紅茶飲んだの初めてで……びっくりしちゃって……」

「それは良かった」

不安気に来瞳の顔を覗き込んでいた青年は一転、穏やかな笑みを湛えた。

「こんな美しいお嬢様に最後のお茶を飲んでいただけ、私は幸せです」

「そんな、美しいだなんて……え？ 最後？」

「はい。間もなく私はロボットとしての活動を停止します。グルゴリオン欠損のためシグニアドライブの維持が困難になっていますので……判りやすく言えばエネルギーが切れるのです」

「間もなくって？」

「そうですね。正確にはあと1時間34分24秒72後です」

「そんな……なんとかできないんですか？」

「それは不可能です。私に組み込まれているイナビジュア・コアはすでに生産を停止しております。もし仮にあったとしても特別製ですから、それを私に組み込める技師がもう存在しません。私はさる大富豪から依頼を受け、特別に開発された執事ロボですから……」

青年は終始穏やかな笑みを絶やさずに、来瞳に優しく話しかけた。

話せば話すほど、来瞳は青年のことをロボットだとは思えなくなってくる。

「あの……死ぬの……怖くないんですか？」

来瞳は遠慮がちに、おすおすとそう質問した。

「『死』ですか？ 残念ながら我々にはない概念ですので、なんともお応えのしようがありません。ただ『活動停止』することに関しては特に何の感慨もありません。エネルギーが切れれば停止する。それだけのことです」

「寂しいとか、自分が消えるのはイヤだとか……」

「それも特にはありません。ただ今、こうして執事としてお嬢様にお仕えし、お茶を召し上がっていた……ということには非常な喜びと満足感を覚えております。自分に与えられた仕事を全うすることがロボットとしての本分ですので……おかわりはいかがですか？」

「あ、はい、いただきます……」

淡々と語る青年の前に、来瞳はただ小さく頷きながら聞くしかなかった。

「ですが……」

「ですが？」

「私は限りなく『人間らしく』ありたいと思って活動してきましたのですが、それが達成できなかったことに対しては心残りがあります。執事ロボとして開発された以上、それはお仕えする主に対して必要不可欠な事だと考えていましたので……」

「お兄さんは十分人間らしいと思います！ ていうか、人間にしか見えません！」

来瞳は率直な感想を述べた。

自分でも思わぬ大声をあげてしまった来瞳は、言い終わった後、真っ赤になってあわてて両手で口をおさえる。

青年は一拍の間を置いた後、くすりと微笑んだ。

「ありがとうございます、お嬢様。でもわたしの主はそう考えなかったようです。ですから今、私はここにいます」

「あ……」

笑みの中に一瞬浮かんだ寂しげな色を、来瞳は見逃さなかった。

「ごめんなさい、辛いこと訊いちゃって……」

「いいえ、かまいませんよ。それより何故このようなところへ？ 自慢ではないですが、ここで人間を見たのはお嬢様でまだ2人目です」

「……」  
「お嬢様？」

「……あたし、ダメな人間なんです」

来瞳は膝ひざの上で拳こぶしをぎゅつと握うづつて俯うつむいた。

「今日もおは……お母さんと喧嘩けんかして……絶対言っちゃいけないことを言っただけ……それで……」

来瞳の聲が震える。両の目に涙がいっぱい溜たまって、それがぼたりと手の甲うでに落ちた。

「お優しいんですね」

青年がそっと絹ぬいの刺繡しすいのついたハンカチで来瞳の手の甲うでを拭ぬった。

「お母様の事、愛してらっしゃるんでしょう？」

「！」

予想外の言葉に、来瞳は顔をあげた。

そこには慈愛じあいに満ちた微笑えいごうみを浮かべる青年の顔があった。

「傷つけるのはそこに愛があるからです。相手が自分にとつてどうでもいい人間なら怒る必要も傷つける必要ありません。ただ、放っておけばいいのですから……」

「……」

「相手が愛いとしければ愛しいほど、人は傷つけあうものだと私は思います。そして許し合えるも

のだとも、私は思います」

「……」

「帰かえってきちんと謝あやまれば、きっとお母様も許ゆるして下さいますよ」

来瞳はただただ黙だまって青年の顔を見つめていた。

本当にこの青年はロボットなのだろうか……？

「よろしければこれこゝろで涙なみだをお拭ぬき下さい」

「……ありがとう……」

来瞳は青年からハンカチを受け取ると、涙をそっとぬぐった。

ハンカチからは微かたかに香水かおのような匂においがした。

「これ、洗あらって返かえします」

「差し上げますよ」

「でも」

「あと1時間28分35秒18後には、私にはいらなくなる物です」

「……！」

こともなげにそう告げる青年に、来瞳は返す言葉を失うってしまっ。

「あ……」

ハンカチを返しあぐねた来瞳のかち手が空からのティーカップに当たり、ティーカップはそのまま椅

子の座面に落下してぱりんと乾いた音をたてて割れてしまった。

「ご、ごめんなさい！……痛っ!?」

慌ててティーカップの破片を拾おうとした来瞳は、その鋭く尖った部分に触れ、人差し指を切ってしまった。

「これはいけません」

青年は手慣れた動作で来瞳の手を取ると、自然な動作で人差し指を口に含んだ。

「えっ!?」

突然の出来事に来瞳は真っ赤になって固まった。

「少しの間、我慢して下さいませ、お嬢様。私の口腔には傷口を消毒し、止血する機能があります」

「は、はひ……」

青年の言葉に納得しつつも、恥ずかしい気持ちは止まらない。

たとえ人差し指の血が止まっても、こんどは頭にのぼった血が吹き出しそうだった。

「もう大丈夫ですよ」

「うわ、すごい……」

傷口は完全にふさがっていた。というか、むしろ人差し指の先だけつやつやと肌が滑らかになっていてそだけ赤ちゃん肌のようになっていた。いったいどういう原理なのだろう……？

「大事に至らなくて良かったです」

「ありがとうございます……」

来瞳はまだ不思議そうに自分の指先を見つめながら囁くようにそう応えた。

「うっ……これは……っ!?」

突然、青年が苦しげに呻いた。

「どうしました?」

来瞳が心配そうに問いかけるが、青年は胸に手を当ててますます苦しみ始めた。

先ほどまでの穏やかな表情とは打って変わって苦悶の表情を浮かべている

「どうしたんですか!? 大丈夫ですか!?」

来瞳がさらに青年に声をかける。

だが額に汗を浮かべ、苦しげに呻く青年はとても応えられる状態ではなかった。

「ど、どうしよう? 救急車を呼ばなきゃ!? あ、でもロボットは病院じゃ診てくれない

し……!? どうしよう、どうしよう!?」

「お嬢……様……私は、大丈夫……です……」

やがて苦しそうな息の下から、青年は途切れ途切れに言葉を接ぎ始めた。

そして真剣な目で来瞳に告げる。

「聞いて……くだ……さい、お嬢……様。私の中には……数千人の『志願者』達の脳の構造



パターンと……その記憶が……凝縮して刻み込まれています……。それは私を有能な執事として……より人間らしいロボットとして……動作させるために必要なデータでした……」

「は、はい？」

突然難しい話を始めた青年に、来瞳はどう反応して良いか判らなかつた。

「今……その『志願者』の中の一人が……貴女に『とても会いたがっています』。そして……その志願者の男性のDNA型は……今、お嬢様が流された血のDNA型と……99%が一致しているのです……」

「！」

青年の言葉が意味するものを察して、来瞳は驚きと戸惑いを同時に覚えた。

「こんなことは……私も初めてで……正直、困惑しています。……ですが、敢えて……その『志願者』の要望……いや、渴望と言った方が正確でしょうか……に従ってみたいと……思います。それがきつと……『人間らしい』行動だと……思いますから……。特殊な駆動モードを使い……ますので……どの程度……システムを維持できるか……判りませんが……今から……」

ふっと微笑みを浮かべた瞬間、青年はくずおれるようにその場に膝をついた。

「！ お兄さん!？」

来瞳は慌てて青年の許に駆け寄ってその肩に手をかける。

「……くるみ」

俯いた青年の口から洩れた呼びかけに、来瞳は思わず息を飲んだ。

それは10年経った今も忘れることのできない、懐かしい「父の声」そのものだったからだ。

「お、おとうさん？」

来瞳はおずおずと返事をする。

が、次の瞬間。

「えっ!？」

来瞳は青年にがっしりと抱きしめられていた。

青年の瞳からすでに止めどなく涙が溢れている。

「くー……くーなのか、本当にくーなのか……もう会えないと……もう二度と会えないと思っていた……!？」

「お父さん……!？」

青年の口から「父の声」で発せられる懐かしい「くー」という愛称。

それによって来瞳は目の前の青年が……いや青年の中に刻み込まれているであろう記憶が……本当に父の物であることを確信した。

「お父さん！ どうして……どうして……!？」

来瞳は声を詰まらせた。

この10年間のさまざまな思いが奔流ほんりゅうのように溢れ出てきたが、その勢いがあまりにも激しすぎて言葉にすることが追いつかない。

ただ二人は抱き合って泣くしかできなかった。



「大きくなったね、クー。……いや、今はちゃんと来瞳と呼ばないと怒られてしまうかな?」

「ううん、クーでいいよ。あたしもそっちの方が好き」

来瞳と青年——正確には青年を通して再生されている来瞳の父の人格——はテーブルで向かい合って座っていた。

「本当に大きくなった……お母さんそっくりになって……」

青年はしみじみと来瞳の顔を見つめた。

「……お父さん」

「ん?」

来瞳は少し躊躇ためらったが、やがて意を決して口をひらいた。

「お父さんと、お母さんは、あたしが……嫌だったの?」

「!」

青年の表情が凍りついた。

「どうして、あたしを置いていってしまったの? どうしてなの?」

来瞳がこの10年間胸の奥に溜め込んだ感情が、静かに爆発する。

青年は苦しそうに顔を歪め、やがて呻くように言葉を吐き出した。

「……それは、お前を生かすためだよ、クー……」

「え?」

予想外の父の言葉に、来瞳は動きを止める。

「私たちといると、お前の命まで危険に晒さらされてしまう……死ぬのは私達だけで十分だ……」

「どういう、こと?」

「それをクーに知らせてしまったら、私達が死んだ意味がない。だからこの青年にもその部分の記憶はあらかじめ削除してあって記録しやくされていない。だから私もこれ以上、喋しゃべることはできない……」

父の言葉に、来瞳はしばらく茫然自失の状態になった。

「……お父さんと、お母さんは、もう生きていないの?」

来瞳の切実な問いかけに、父は応えを躊躇ためらった。

「……おそらく、99.9%の確率で、そっだ」

「あたしを、生かすために……お父さんと、お母さんが……」

そこまで言って来瞳は顔を伏せた。

「……たかったよ」

「どうした？ くー？」

「そうだったんなら、あたしもお父さんとお母さんと死にたかったよ！」

「くー……」

「あたし一人だけ、あたし一人だけ生きていても……生きていてもしょうがないじゃない！」

「そんな事を言うんじゃない！」

「！」

突然青年が立ち上がってテーブルを叩いた。

「そんな事を……言うんじゃない……」

「お父さん……」

しばらくの沈黙ちんもくのあと、来瞳の父はそっと彼女の手をとった。

「くーにはいろいろ辛い思いをさせてしまっすまなと思う……。だが私達はそれでもくーに生きていて欲しかったんだ」

「うん……」

「これだけは信じて欲しい。お父さんとお母さんもくーのことを愛していた。本当はくーと別れなくなかった。ずっとずっと一緒にいたかった……」

「うん……」

「でも、お前を生かすためにはこれしか選択肢がなかったんだ……」

青年は真剣な瞳で来瞳を見つめた。

「わかった。ありがとう、お父さん」

来瞳は父の手を強く握にぎり返した。

そして二人はそのまましばらくただ、見つめ合っていた……。

「そろそろお別れの時間のようだね」

「え？」

「くーと再会する機会を与えてくれたこの青年に、よくよく御礼おれいを言っておいてくれないか。この1時間は失った10年にも匹敵するほどの濃密な時間だったと……」

「……うん」

「さようなら。ありがとう、くー」

「お父さん!？」

そして来瞳の父——人格再生を終えた青年——は糸が切れた人形のようにがたりとテーブルに突っ伏した。

「お父上とは無事、会えましたか？」

「はい、10年分、いっぱい話しました」

「そうですか。それは良かった……」

意識を取り戻した青年は、再び穏やかな表情で来瞳に微笑んだ。

「お嬢様」

「はい」

「私は、今、初めて死にたくないという気持ちが判りました」

「！」

青年の言葉が来瞳の胸に痛いほど突き刺さった。

「あと1分40秒32後には、お嬢様とこうして話すことが二度とできない……そう思うと、胸が張り裂けそうな気持ちになるのです……これが人間らしい感情、というものでしょうか？」

「お兄さん……」

「ですから」

青年は静かに来瞳の前にひざまずいた。

そして右手を首の後ろにやると、そこから小さな名刺大のカードを取り出した。

「これを受け取ってほしいのです」

「……これは？」

「私のこれまでの記憶をすべて記録したメモリ・コンダクターです。ここにはお父上の記憶も一緒に書き出されています」

「……！！」

「これをお嬢様にとっていて欲しいのです」

「はい……ありがとうございます……」

「そして……私を忘れない欲しいのです」

「もちろんです！ お兄さんのことは一生忘れません！ 絶対です！」

メモリ・コンダクターを受け取った来瞳は青年の手をとってそう叫んだ。

「ありがとうございます。最後に、お嬢様に会えて、本当に良かった……」

青年は安堵の表情を浮かべ、ゆっくりと目を瞑った。その頬に一筋の涙の跡が刻まれる。

「……お兄さん？」

来瞳の呼びかけに青年が反応することはもうなかった。

シグニアドライブが停止したのだ。

来瞳はしばらく青年の手をとったまま、動けなかった。

青年の手はまだ温かく、とても死んだとは思えなかった。

「ありがとう、お兄さん……お父さん……」

来瞳は青年からもらったメモリ・コンダクターを愛おしそうに人差し指で撫でた。  
そしてそれをポケットから出した写真を重ねると、とてもとても大切そうに、ゆつくりとハ  
ンカチで包んだのだった。

おしまい